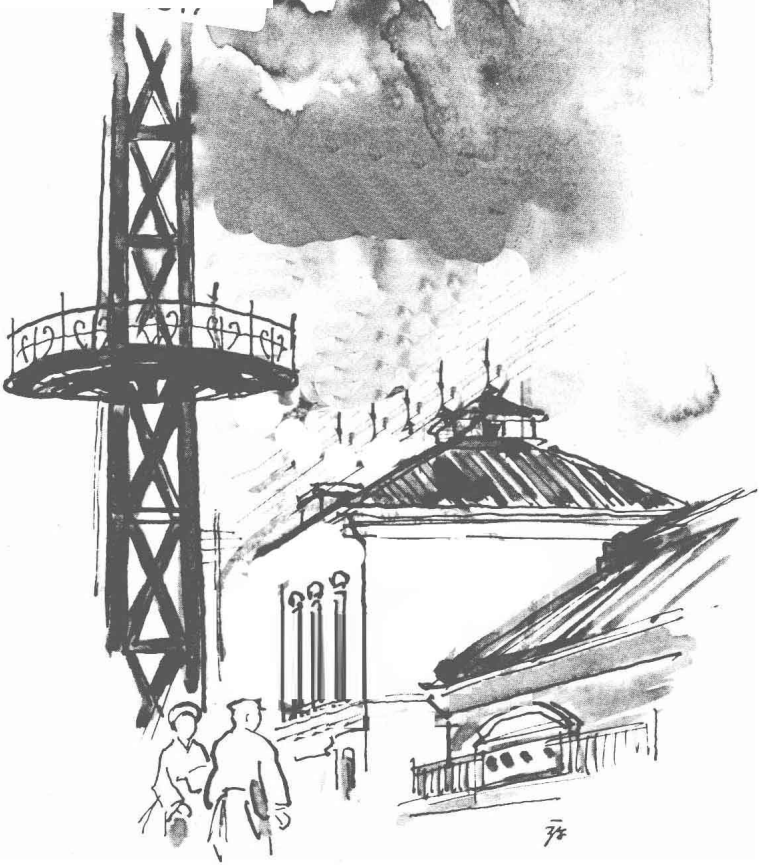
大東京繁昌記

山手篇

大東京繁昌記

山手篇



講談社

大東京繁昌記〈山手篇〉
昭和五十一年十月二十八日　第一刷
著者　島崎藤村ほか
発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二丁目十二番二十一　郵便番号一一二
電話東京(〇三)九四五一一一一(大代表)　振替東京八一三九三〇
印刷所　信毎書籍印刷株式会社
製本所　藤沢製本株式会社
落丁本・乱丁本はおとりかえいたします
©島崎楠雄ほか　一九七六年

定価はカバーに表示してあります（文2）

目次

飯倉附近　島崎藤村　画 木村荘八　七

丸の内　高浜虚子　二九

山の手麹町　有島生馬　自画　三七

神保町辺　谷崎精二　画 田中咄哉　三三

大学界隈　徳田秋声　画 木下孝則　九一

上野近辺　藤井浩祐　自画　一三

小石川　藤森成吉　画 中川紀元　一四五

早稲田神楽坂　加能作次郎　画 安宅安五郎　二六三
四谷、赤坂　宮島資夫　画 辻永　二〇三
芝、麻布　小山内薫　画 森田恒友　三三
目黒附近　上司小剣　画 中村岳陵　三三七

装釘意匠　中一弥

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

大東京繁昌記

〈山手篇〉

「大東京繁昌記」は昭和二年三月十五日から十月三十日まで東京日日新聞の夕刊に連載されたもので、「下町篇」が翌三年九月、「山手篇」が同十二月、春秋社から単行本として刊行されました。

震災後の大東京の変遷を、実地に踏まれて文に画に尽くされた、五十年前の大東京を知る貴重な文献であり、裨益するところ多々あることと、このたび再刊することにいたしました。

挿画はすべて春秋社版を原寸で複写しましたが、そのために横位置のものの出ましたことをご諒承願います。

なお、「山手篇」所収の島崎藤村「飯倉附近」は、当時藤村臥床のため東京日日新聞の連載に参加できず、後に雑誌に発表されたものに加筆し、春秋社から刊行の際同書に収録された由であります。

終りに本書の再刊に際して寄せられた関係各位のご厚意を感謝いたします。

飯倉附近

島崎藤村
画 木村荘八

仏蘭西の旅から帰った当時、しばらく高輪二本榎に暮した。芝の桜川町に移ってから、そこでも一度年を越した。桜川町は愛宕下につゞき、虎の門にも近く、どこへ出るにも便利の好い位置にあったが、一体にあの辺は窪地を埋め立てゝつくった町でゝもあるのか、湿気は多かった。庭の土の僅か二尺ばかりも掘り起されたところを見ると、そこから水の湧いて来るような場所であった。私はもっと高台の方に住みたいと思い、やがて西久保八幡の前から榎坂を上って引移って来たのが、今の飯倉である。

こゝに住みはじめた頃は、東京天文台も近くにあった。私はまだ帰朝者としての気分を失わずにいる頃で、何となく三年の巴里生活を思い出した。私の仏蘭西だよりなぞを書いた遠い旅にあっての下宿は、巴里の天文台に近かったから。こゝは曽て透谷の住居のあった芝公園の境内へも遠くない。透谷はあの紅葉館の裏手にあたる谷間に住んで、短い生涯の最後をもあそこで送った。青年時代の私がよく友達の住居を訪ねたのも、あの樹木の多い谷間であった。そんなことも何がなしにこの飯倉附近をなつかしむ種になった。

私はまだずっと以前の飯倉をもいくらか覚えている。西久保から赤羽方面への通路にあたる坂に沿うた町、丘の上の古い教会堂、あの辺は自分の少年時代の記憶を喚び起す。言って見れば、この飯倉の一部は愛宕下あたりのような寺町ではないまでも、すくなくも増上寺を中心にして発達した町の跡ではあったろう。飯倉町は六町あって、一丁目二丁目は神谷町につゞき、三丁目から末は赤羽橋の通りである。俗にいう土器町は閻魔、笠森稲荷、瑠璃光寺などに沿い、一部の寺町を形造っていたものであろう。今でも赤羽橋の畔に近いところに諸宗の仏書をあきなう古本屋があるが、あの店なぞもその名残かと思われる。

この界隈はまた古い屋敷町の跡でもある。飯倉四つ辻から榎坂を上ったあたりは一帯にその屋敷町の跡だ。上杉、稲葉、戸田、その他旧藩の主従が大家族を形造りながら住んだという屋敷の跡は、最近まで諸華族の居住地として電

車通りの両側に残っていて、その中でも狸穴坂に近い小屋敷の跡には、昔のまゝの黒く塗った門や、扉や、古風な出格子の窓まで見られた。斯うした町の一部は今、改変の最中にある。広い庭園の跡には分譲地の札が立っている。この空虚な場所の板がこいが広告板に応用されて、普通選挙の当時は候補者の名で埋まったことは、まだ町の人達の記憶に新しくてあるだろう。私は市内から仏壇や墓地まで挙げて郊外の方へ移って行った一、二の古い寺を直接に知っている。屋敷も、寺も、今は動きつゝあるのだ。

遠い昔のことは全く想像も及ばない。この辺は往古の伊勢神宮の厨の地で、飯倉とはその饌料の稲を収めた倉から来た地名であるとか。芝神明宮も飯倉神明宮と称えて、昔は飯倉の地にあったという。今の桜田門あたりも飯倉の内であったという程だから、ずっと昔の飯倉はかなり広い地域であったに相違ない。

寺町、屋敷町としての跡もであるが、この飯倉には江戸時代からの通路の名残も見られる。品川方面から袖が浦の岸に沿うて延びて来ていた昔の東海道は、札の辻のところで二つに分れて、一方は芝口から日本橋の方へ続き、一方は赤羽から飯倉に続いていたものであろう。札の辻附近の番所、大木戸を経て、山の手へとこゝろざした西からの旅人は、いずれもこゝを通路としたものらしい。飯倉町辺の昔の賑かさも思いやられる。よく見れば、この附近には新開の町なぞにないような特色の深い小路もある。飯倉二丁目の裏手に隠れている路次、飯倉三丁目にある熊野神社の近くから旧天文台の方へ登ろうとする細い坂になった小路なぞは、私の好きなところだ。旧稲葉邸の角から我善坊の方へ通う静かな横町も悪くない。就中、この辺の昔を語っているのは飯倉一丁目の雁木坂であろう。坂の名をガンギというそのいわれはよく分らないが、駕籠で往来した時代の名残をそこにあり〳〵と見ることが出来る。足を踏みしめ踏みしめ昇降したらしい駕籠かきの歩いた路は、あの刻んであるような古い石畳みの階段に残っている。

遠い仏蘭西の旅でのことを思い出して見る。巴里のサン・ゼルマンといえば、ずっと以前には殷盛を極めた町で、そこへ買物に行く女のことなぞがモオパッサンの小説にも出て来るくらいのところである。おそらくあの仏蘭西の小説家がまだ達者でいた時分には、サン・ゼルマンは巴

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

飯倉附近

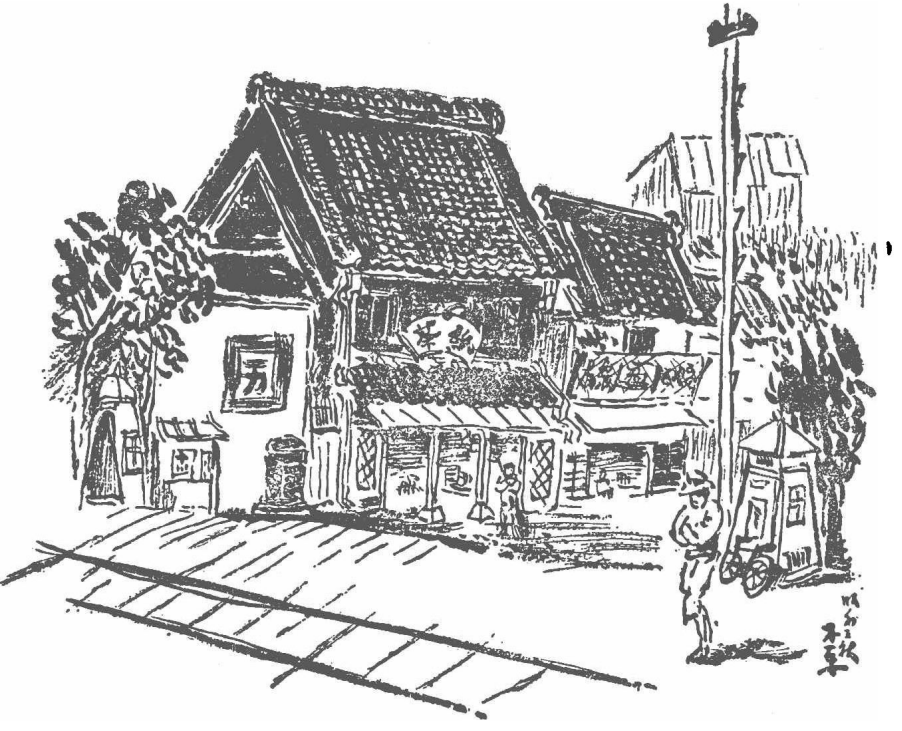
里でも目ぬきの町であったろう。旅人としての私達があの町を歩いて見る頃には、繁華はもう他へ移ってしまっていた。三年ばかりもあの都会で暮して見るうちに、本屋、文房具屋、などの好ましい店が、サン・ゼルマンのさびれた通りに残っていることをも知った。

同じ都会の中でもこんなに町の動いていることは、東西共に変りはないようだ。これは交通機関の移動や市区の改正により、市場の変遷に伴う幾多の関係により、地価の騰貴、沿道改築費の負担、諸税の増加、その他種々な経済事情によることはもとより言うまでもないが、しかしそれば かりでなしに、町には町の性格があり、生長があり、老衰があり、また復活もあって、一軒二軒の力でそれをどうすることの出来ないようなところもあるかと思う。でも、曽て栄えた町の跡と、まるきり栄えたことのない町とでは、歩いて見た感じが違う。あだかも城として好かったところは、城址として見ても好いようなものだ。

過ぐる年の震災が来た。その時になって見ると、この飯倉附近にある古いものが、にわかに光って見えて来た。何故かなら、こゝにある古い商家の黒光りのした壁、その紺暖簾のかゝった深い軒なぞは、今ではもう日本橋あたりにも見られないものであろうから。私はあの石町、大伝馬町それから橋町あたりに軒を連ね甍を並べていた、震災以前の商家の光景を忘れることの出来ないものであるだけに、一層この感が深い。この界隈には安政の大地震にすらびくともしなかったというような、江戸時代からの古い商家の建物もある。紙屋兼葉茶屋としての万屋（深山）、同じ屋号の糸屋、畳表屋、今は洋服専門であるが以前は大きな呉服屋であったという山城屋、好い店も多い。飯倉一丁目にある三つ星は明治初年に開業した最初の牛肉店の一つであるということも、この辺の昔を語っていないだろうか。その近くには、さゝやかな店頭に草鞋を掛け、煙草をも並べて、五十年このかた同じように商売をしているという家もある。

新しい創意に富んだ建築家としてのライト氏のことは、帝国ホテルなどの設計で多くの人に知られている。このライト氏が飯倉に一つの住宅の意匠を残して置いて行ったことは知る人もすくない。例の雁木坂に近く、大師堂のならびにその家がある。簡素な伊豆石を按排した入口の趣きも深い。今はこの界隈にもかず〳〵の新式な建築物を見るが、あれほど周囲とよく調和し得たものはめずらしい。床

飯倉附近



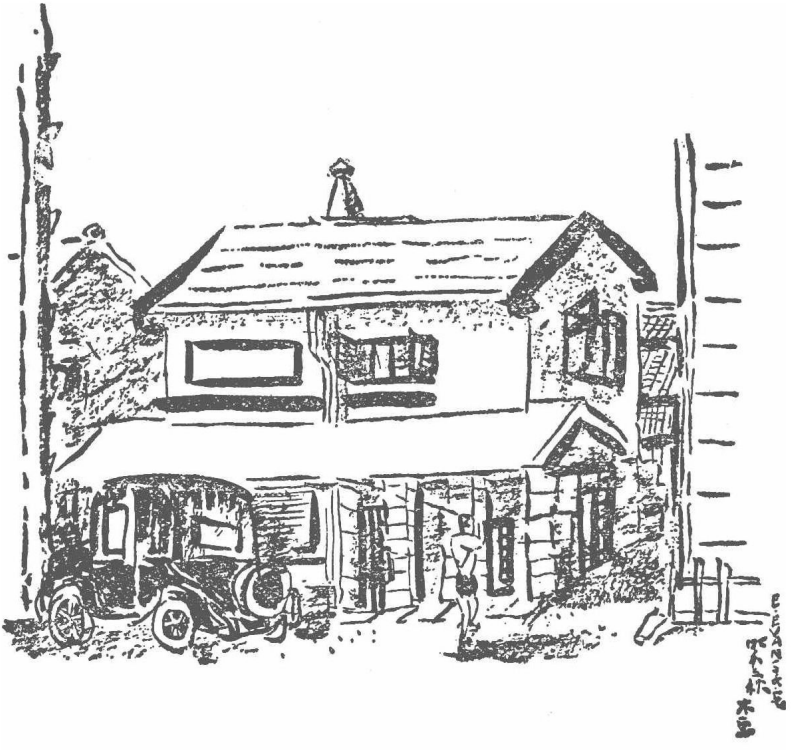
しい意匠だと思う。

ある日、増上寺の境内へ行って、新築後の本堂の柱の側に坐って見た。廻廊を踏んで行くいろ〳〵な参詣者の後について、高い天井の下を一廻りして見た。曼陀羅の図の掛った壁の前にも行って立って見た。私も外国から帰ったばかりの頃には、東京にある増上寺の位置は、あだかも巴里にあるノオトル・ダムの位置にも当ろうかなど思い比べて見たこともあった。しかしこの空想は直ぐに破れた。私の坐って見た本堂の柱の側は、巴里のノオトル・ダムとは全く別の場所だった。やはり私は帰朝当時の気軽さから、まだ半分遍歴者のような気分で、たゞ〳〵東西にある二つの寺院を比較して見たというに過ぎなかったことを知った。

ある日、愛宕下にある青松寺の境内へも訪ねて行って、奥まった庭の見える内陣の裏手へ行って立って見た。遠い旅にある間、私もゴシック風の建築に興味を覚えて、仏蘭西に多い羅馬旧教の寺院をあちこちとよく訪ね廻ったが、自分等の国の寺院に見つけるようなすぐれた庭ばかりは仏蘭西あたりにも無いものだと思った。あれは全く東洋のものという気もする。青松寺の番僧に案内されて、私があの廻廊に出たのは、まだあの寺の焼けない前のことであった。一面の芝生があるだけの庭だ。唯一つ、庭の向うに古雅な石燈籠の配置してあるのが眼についた。その空虚でしかも生気のある、青々とした芝生の上に薄日のあたった感じは、森の奥にでも見るものゝような気がして、忘れがたかった。惜しいことに、過ぐる年の震災が来て、今はあの庭も無いものだろう。

南に浅い谷の町をへだてゝ狸穴坂の側面を望む。私達の今住むところは、こんな丘の地勢に倚って、飯倉片町の電車通りから植木坂を下りきった位置にある。どうかすると梟の啼声なぞが、この町中で聞える。私の家のものはさしがって、あれは狸穴の坂の方で啼くのだろうか、それとも徳川さんの屋敷跡の方で啼くのだろうか、と話し合った。東京の人の言草に「麻布のキが知れない」ということがある。それは何の意味ともよく分らないが、すくなくも下町の方に住む人達の中には今だに藪だらけの高台のように麻布の奥を考えているものもあるらしい。そういう人達ですら、梟の話ばかりは信じまいかと思う。もしこの地勢について幾つかの横町を折れ曲って行って見ると、あると

飯倉附近



ころは一廓を成した新しい住宅地のごとく、あるところは坂の上下にある村のごとく、鶏の声さえ谷のあちこちに聞えるようなのが、この界隈の一面である。野鳥のおとずれさえこゝではそうめずらしくない。

飯倉片町おかめ団子とやら。こんな俗曲にある文句の出所もよく分らない。片町の停留場から麻布区役所のあるあたりへかけて、あの辺の高台は東京の町の中でも最も高い位置にある場所の一つとは聞く。南葵文庫も近い。そこに茂っている椎の枝は、通りすがりの電車の窓からでも望まれる。あの椎はあまりに枝をひろげ過ぎて、遠く離れて見ても樹木の全景をつかむことは一寸困難なくらいだ。この界隈での大きな木だ。斯うした高台の上に、あの周囲を支配して立っているような椎の老樹を置いて考えることも楽しい。

いくらかでも眺望のある坂の上の位置に出ると、私はそこから芝浦を望み見たいような思いに誘われる。殊に病気した後はそれが強かった。どうかして私はこの附近に海の見えるところを探したいと思って、時には島津山の方まで行き、時には芝浦の方角に遠く空のひらけたところなぞを眺めたゝずむこともあった。

高台で思い出す。麹町の方に住む友人の家を訪ねて、そこの家族と一緒に清水谷の公園の方へ歩いたことがあった。それから星が岡の上に出た。静かな樹蔭があって、その間を透して、赤坂方面に町つゞきの丘を望んで来た。あれはいかにも武蔵野に出来た都会という感じを起させるものであった。東京のような土地には、起伏している丘の地勢を望み得る場所もかなりある。不思議と、丘は、山ほど多くの人の注意をひかないが、私は山の手方面を歩いているうちに、思いがけなく丘のいろ〳〵な形を見つけるのを楽しみに思う。

芝公園の境内にあった透谷の旧い住居の位置から、深い木立の間を通して、おもしろい丘の姿を望んだ時のことも、今だに忘れられずにある。あの時に芝の方面から望んだ丘の地勢こそ、今私達が住んでいる麻布区内の高台の一端だ。

鼠坂は、私達の家の前あたりから更に森元町の方へ谷を降りて行こうとするところにある細い坂だ。植木坂と鼠坂とは狸穴坂に並行した一つの坂の連続と見ていゝ。たゞ狸

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com